
子ども・養育者・支援者をつなぐ 複雑性トラウマへの メンタライジング・アプローチ

ニコール・フリーゲン, アイリーン・タン,
ニック・ミッジリー, パトリック・ライテン,
ピーター・フォナギー著

那須里絵, 木村能成, 御園生直美監訳
佐藤明子訳

北大路書房, A5判360頁, 4,950円, 2025年10月刊

(総合母子保健センター愛育クリニック) 小平雅基

2016年の児童福祉法改正以降, 日本の社会的養護は施設養護中心から家庭養育優先へと大きく舵を切ってきている。国はかなり高い里親委託率を目標として掲げており, その結果現場では養育家庭への十分な支援が整わないままの委託を増やしてきている。結果として措置変更や養育の破綻が生じるケースも少なくない。家庭養育への移行を制度として進める一方で, 「どのように支えるのか」という実践上の問いは切実であり, それは各現場に任されたまま皆が暗中模索している状況にある。

本書は, 幼少期に深刻な対人関係上の困難を経験した, 国際養子縁組や長期里親委託の背景をもつ児童期の子どもたちを対象に, フランドル地方で開発された治療ガイドであり, 上記のような問いを持つ日本の多くの現場の専門家に光明を与える一冊となっている。精神力動的な児童心理療法の長い伝統に基づく知見を, 現代のメンタライジングに基づく原則やトラウマからの影響に関する神経科学的知見と統合した内容となっている。

第一部では理論的背景として, 早期の逆境体験が①表象能力②感情の発達と感情調整の方略③アタッチメントの発達と関係性構築能力④自己感とアイデンティティという4つの重要な領域で, 発達パターンとプロセスをいかに混乱させるのかということについて論じられている。また, こうした困難が子どもだけでなく, 養育者や支援者のメンタライジング能力にも大きな影響を与える点も丁寧に示されている。第二部では, これらを踏まえた治療モデルが具体的な臨床作業として展開されていく。

特に印象的なのは、本書が治療を「三本柱」、すなわち「子ども、養育者、そして支援者ネットワーク」として捉えている点である。支援者ネットワークそのものを治療作業の対象として明確に位置づけている点は、本書の大きな独自性といえる。複雑性トラウマを抱える子どもを育て、成長を支えることがいかに困難であるかを前提に、養育者や家族の周囲に、メンタライジング的かつトラウマインフォームドな支援の網を張り巡らせる必要性が繰り返し論じられている。

さらに本書は、治療者自身もまた孤立してはならないことを明確にしている。チームや組織レベルでの支援が確保されない状況では、この治療アプローチの実施を支持しないという著者らの姿勢は、日本の臨床現場においても重く受け止められるべき指摘であろう。善意や熱意だけでは支えきれない現実を、理論と実践の両面から直視している点に、本書の誠実さがある。

本書には四人の子どもの事例が登場するが、いずれも深刻なトラウマを抱える子どもたちを代表する存在として描かれており、読者は自身が臨床で出会ってきた子どもや家族の姿を重ね合わせることであろう。「子どもの生傷が癒され、傷跡になる過程に関わること、そして主要な養育者や支援者たちが、トラウマをもつ子どもと共に暮らしたり、このような子どもと向き合ったりすることに制御感と楽しみを取り戻せるよう支援することこそが、絶望を希望に変えることの核心」という終盤の言葉は、本書全体を貫く臨床的メッセージである。家庭養育への移行期にある日本の支援現場において、本書は理想論ではなく、実践に耐えうる思考の枠組みを提供する一冊として、臨床家に深い示唆を与えるだろう。

原書：Nicole Vliegen, Eileen Tang, Nick Midgley, Patrick Luyten, Peter Fonagy : Therapeutic Work for Children with Complex Trauma : A three-track psychodynamic approach